

窪田亜矢委員長

今年も多くの応募をいただき、どうもありがとうございました。地域のリスクに立ち向かう提案に勇気をいただきました。

専門家のプロボノとしての関わり方についての審査員間での議論が印象に残っています。「地域に根付いた団体と外からの専門家が協働するためには立ち上げ時こそ助成が必要だ」、「ある程度の試験運転は済ませたからこそ確実な活動ができるので必要な支援をしてほしい」など多様な主張がありました。

いずれにせよ、今年度の助成の有効な使い方が、各地の仲間の次に繋がります。選ばれた団体は、失敗からも積極的に学び、意義のある活動を、どうぞよろしくお願いいたします。

饗庭伸委員

切実なニーズに基づくものが少なく、相対的に価値創造型のものが多くあったことが今年の特徴です。価値創造型の場合、いかに他者を巻き込んで価値を共有していくかが問われるわけですが、助成対象となった活動は、それぞれが打ち出す「価値」がユニークだったこと、他者の巻き込み方が巧みで、自分たちが活動している地域のことをよく読み取れている活動が多かったと思います。大きな成果を期待したいと思います。

黒瀬武史委員

応募を通して、改めて地域の現場の悩みや課題を考える時間を頂きました。住まい活動助成では、特に空き地や空き家の問題を抱える戸建住宅地や集合住宅に注目しました。新たな課題が生まれるなかで、既に充実した実績のある活動だけでなく、これから活動を始める方々への支援も大切だと考えました。

助成された活動から、小さくても課題解決の糸口が見出され、その成果が地域で活動する仲間へ広く共有されることを願います。

関由有子委員

地方で暮らしていると、少子高齢社会や介護・福祉という社会の潮流が、総論でなく、身近な生活の場に迫っています。共助見守り、空き家、移住、関係人口というキーワードから、住まいと地域コミュニティの「イマ」が浮き彫りになってきました。地道な活動はすぐに成果が表れにくいものです。そんな時は、「ヨソ」で活動するグループと交流してください。比較することではなく、多様性と共通項を語り合うことも大切でしょう。

この助成と交流支援を通じて、身近な活動が地域づくりの核に育っていくことを、また住み継ぐ知恵と工夫が周囲に波及していくことを願っています。

丁志映委員

今年度の助成応募事例の中には、「先進性」・「手法」・「波及性」の観点から優れていましたが、「実行性」と「継続性」の観点が欠けていて、助成の機会を逃してしまった大変残念な事例がいくつかありました。今回選ばれなかった団体は、選考ポイントを再度チェックしてぜひ来年度チャレンジして頂きたいです。

私自身、外国で調査や研究活動をする場面が多いのですが、皆様の活動成果は、日本のみならず、今後超少子高齢社会、減築社会等を迎える他国において様々な場面で大変参考になると思います。今年も選考の中で多くを学ばせて頂きました。ありがとうございました。

寺川政司委員

興味深い取組みが多く、選ぶ事の難しさを体感いたしました。なかでも建築ストックのリノベーション提案が多いようでしたが、コミュニティ形成やハウジングの分野でヒト・モノ・コトをつなぎ合わせるマネジメントの仕組みに関して、新たな可能性とリアリティがある提案を選ばせていただきました。多様な価値観が共生する現代社会におけるコミュニティや地域とはなにか、それに関わる専門性について考えさせられる機会となりました。

山下馨委員

社会構造、地域社会の変化は、従来の知識やノウハウでは対処困難な課題や問題を私たちに突きつけています。住民、市民が自ら主体的に動き、支援者と連携し、新しい価値観や想像力、構想力を導入し、身近な世界をイノベートするしか未来を切り開く術はないでしょう。採択の有無はともかく、今年度の多くの提案はどれも、地域イノベーションの大切さに気付いたものです。残念ながら採択されなかった提案も、さらに実行体制、事業プログラム、地域とのつながり方の工夫などについてブラッシュアップしていくべき大切な活動です。皆様のさらなるご活躍を期待します。

松本昭委員

今年も、地域に真摯に向き合い、地域主体で取り組む多くの活動申請がありました。選考にあたっては、①活動を成長させ、活動を持続させる提案 ②地元主体で地域全体の課題に取り組む活動、③活動の横連携や波及性が期待できるものを重視し、地域・コミュニティ活動を伴わないもの、活動計画や活動場所が未定・未成熟のものは選外としました。また、地域と専門家の協働的活動、プロボノ的な活動に対する助成のあり方を考える機会になりました。